

《リメイク》とある科学の確率操作

々々

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

木原の姓を持つ青年は、科学と魔術が交差し、あらゆる人の思惑が交差し合う世界を思うままに暮らしていく。

目次

第0章 存在 (Existence)	
とある木原の後輩思い	1
とある木原の交流関係	7
とある魔術の禁書目録	12
閑話 1	18
第1章 認知 (Perception)	
降臨または落下	22
遭遇もしくは出現	27
是か否か	33
閑話2-1	39
閑話2-2	45
単なる気まぐれ I It's a lie.	53

第0章 存在 (Existence) とある木原の後輩思い

「暑いし、怠いし、面倒くさい。飾利、代わりにこれをやってくれよ」残り少しで夏休みだという今、気温は天井を知らないのかという程上がっている。エアコンは調子が悪く、冷風ではなく温風が出る南半球ならば喜ばれるであろう現状となっている。

ここは風紀委員本部所属、現第一七七支部臨時所属の木原きはらぶそく分数は自分に割り当てられた机の上で溶けたように突っ伏している。

「そんなのでどうしますの先輩。それに初春はここにいませんのよ」

悪態をつく彼に白井黒子が活を入れる。木原は第一七七支部に4月に所属となったため、この支部の先輩は白井であるものの、風紀委員の先輩は木原である。

しかし今となってはそんな事は関係なく、数多くの仕事を共にこなして来た彼らの絆は強固な物となっている。

そんな彼女の言葉が気に入らなかったのか、力の入っていない体で冷蔵庫から冷えた水を取り出しながら愚痴をこぼす。

「それもこれも飾利が『私超電磁砲レールガンに会ってみたいです』なんて言うからだろ。そこに黒子も乗っちゃってさ『紹介しますの』なんて言っちゃってさ」

支部のミーハー代表と言っても過言ではない飾利は木原とほぼ同時期に入っており、この支部の中での地位的なものは一緒のはずだった。

「固法が『それなら分数くんぶんすうくんに全部の仕事回しちゃっていいわよ』ってなんなんだろうな。暇っちゃ暇だけど、やんなきゃいけない事はそこそこあるんだけどな」

「落ち着いてくださいまし木原先輩。それは本当に申し訳ないと思っていますの、私もエアコンがこんな事になってるなんて思ってませんでしたの」

「まあいいさ。先輩の甲斐性をここで発揮したと思えば溜飲を下げるさ」

ペットボトルの水を飲み干しゴミ箱に投げ入れる。

「つてか『木原先輩』は止めてくれ。あんまり『木原』って呼ばれるのは好きじゃないんだ」

「あら、またやってしまいましたわ。これから気をつけますの」

学園都市の暗部を知らない白井にとって『木原』の名前は他の名前とさしたる違いはない。

だが少しでも暗部に触れたものなら、『木原』という名前はあまりにも大きな意味合いを持っていた。

「ほら白井、時計見ろ。お前から聞いてた時間にそろそろなりそうなんだが」

「え!?! お姉様を待たせる訳にはいきませんの!! それでは先輩、後のことはよろしくお願いしますの!!」

空間移動テレポルトで支部から出ていく白井に手を振ると、再び席に着き初春から回された書類に手を付ける。

半分くらい終わった頃、ふと後輩達の事が気になって演算わしなを行ってみた。

「彼女らが事件に巻き込まれる確率は100%か。ちやつちやつと仕事を終わらせて、可愛い可愛い後輩達に会いに行きますかね」

木原一族の中で最も異端とされた青年は、優しく言の葉を紡いだ。

御坂と黒子と初春、そして佐天の四人は広場で仲良くクレープを食べている。黒子は御坂と佐天が仲良く食べさせ合いをするのを見て、自分も御坂と食べさせ合いをしようと無理矢理迫っていた。

そんな二人を尻目に、初春と佐天は話をしてる。

「レベル5つて言っても私達とあんまり変わらないんだね。なんか拍子抜けって感じ」

残り少なくなったクレープを一気に口の中に放り込む。思ったよ

りも大きく、ほっぺが膨らむ。

「佐天さんの言うとおりでですね。私ももつと近寄りがたいのかなって思ってたんですが、そんなことありませんでしたね」

御坂よりもレベルが1つ下な白井や木原も、初春と仲良くしている。あんまりレベルによる違いなんて無いのかもしれないと初春は思う。

「どうせなら分数さんも一緒に紹介したかったですね」

「その分数さんって初春の支部にいる人だっけ？」

「そうです!! 本部から派遣されてきた人なんですけど、ネットとかでは『本部から来る人は支部の人を馬鹿にしている』とか悪い印象しか書かれてなかったんですが、実際会ってみると優しい人なんです! 分数さんだけかもしれないんですけど、私達のことを気にかけてくれて、お兄ちゃんがいたらこんな感じなのかなって思ってるんですよ!!」

クレープをベンチに起き、少し興奮気味に話す初春に佐天は少しだけ引いていた。思えば初春がこんなにテンションを上げるのは珍しい気がする。

「そ、そうなんだ。お兄ちゃんみたいな人か、あたしちよつと気になるな」

「ならこの後支部に行きますか? お仕事を押し付け……お仕事をしている最中なのだと思いますよ」

初春はどんな風に木原を紹介しようか、佐天は木原がどんな人かを想像していると、二人は近くの銀行のシャッターが降りていることに気がつく。

「ねえ初春。こんな真つ昼間からシャッターを降ろす銀行ってあるのかな?」

「分かりません、何かあったん……」

「ですかね、と言葉は続かなかった」

防犯シャッターは内側から激しい爆発と共に吹き飛ばされる。初春は携帯を取り出し、支部と警備員アシキスギルに連絡をする。

黒子は持っていたクレープを急いで食べ、学生鞄から腕章を取り出

し腕に付ける。

「初春は怪我人の確認！ お姉様はそこにいてください」

「えー」

レベル5といっても血気盛んな中学2年生。自分に力がありながら現状を見ていてるだけという後輩の言葉は面白くない。

「風紀委員ですの！ 器物破損および強盗の現行犯で拘束します！」

黒子は犯人グループに手も足も出させないまま一方的に拘束した。だが、そんな彼女にも見落としがあった。一人が逃げていることに気が付かなかった。

その男は、近くで学園都市の見学に来ていた一人の幼児を連れて行くこうとしていた。

それに唯一気が付いた佐天は単身でその男の元へ駆けていく。

「ちよつと待ちなさいよ。その子をどうするつもり？」

「うるせえな、なんだ？ 邪魔するつもりか？」

自分よりレベルの高い人が自分と変わらない事に気がついたのか、それによって自分も出来ると思ったのかは、佐天自身にも分からない。い。

ただ気がついたら足が動いていた。

「そ、そうよ。だからその子から手を離しなさい！」

「どうしたんだ嬢ちゃん声も足も震えてるぞ」

「ふ、震えてなんかないわよ。あなたが手を離さないなら、あたしはここから動かないから！」

強がっている事は自分にも分かっている。それでも佐天は自分の言葉を言い放つ。

「ちっ、面倒だな。殴ってやらなきゃ分からねえのか？ なら殴ってやるよ」

啖呵を切るのは良かったが、迫り来る拳を見てこんな事言わなければ良かったと後悔した。もうどうにでもなれと、硬く目を瞑る。

だが、佐天の虚勢で作り上げた震える心を包むような優しい声が聞こえる。

『殴れる』なんて事象が『起きる筈がない』

ピーンと糸が張られたような、初めて聞く音が辺り一帯に響く。いつまでたつても衝撃が来ない佐天は、閉じていた目を開く。

男の拳は佐天に当たるギリギリで止まっている。男は自分の拳が動かない事に戸惑いを覚える。どんな風に動かそうと目の前の佐天を殴ることは出来なかった。

「オマエの覚悟は中々の物だ。けど向こう見ずな勇氣は自分を傷つけるぞ」

「へ?」

声の正体、分数は佐天の頭を撫でながら優しい言葉をかける。頭から手を離すと、男に近寄り殴る方とは逆の方の手で掴まれていた子供を男の手から解いた。

そのまま男の脚を払い、地面に叩きつけポケットから取り出した手錠で拘束する。

「これにて一件落着つと。悪いけど、この子を保護者か先生の元まで送り届けてくれないか?」

分数はそのまま男を俵のように肩に担いで白井の方へと歩いていく。

言われた通り親の元へ子供を連れて行くと、頭を下げられ感謝されてしまった。自分はただ止めようとしたただけだったのに、しかしそれは心地のいい物だった。

「本当に申し訳ありませんの。この白井黒子がすべて悪いんですの」
「だからオマエはいつまで経っても半人前だって言われるんだ。ただ制圧するだけなら訓練を受けてない奴でも可能なんだぞ?」

佐天が皆のもとに戻ると白井が分数に叱られていた。先程までの凛々しい彼女とは違った表情は、それはそれで合っていると思った。

「佐天さん!!」

御坂が駆け寄り、初春が佐天に抱きつく。

「心配しましたのよ佐天さん!!」

「そうです!!　いきなりいなくなつて!!　あの時も先輩がいなかったと思うと」

説教が終わり悩ましげな表情をする白井と木原もやって来る。

「申し訳ありませんの佐天さん。わたくしの不注意であんなことに」

「いいのいいの白井さん。ほら私は無事だし、ね?」

「よかつたな黒子。まあ、始末書は書かされるだろうがな」

「あの!　先程は助けていただきありがとうございました。なんとお礼を言つたらいいのか」

「別にいいよ、後輩の面倒を見るのも仕事っちゃ仕事だし。好きなことだから」

「佐天さん、さつき私が言つたこと覚えてますか?」

何だつたかなと考える。少し前の事なのに、次にあつた事が大きすぎて何だか思い出せない。

「先輩を紹介するつて言つたじゃないですか」

「ああ、そうだった!」

「つてことで先輩!」

「え?」

いつ買つてきたのか、クレープを頬張っている木原は話を聞いていなかったようで、きよとんと初春の方を見る。

「あなたの紹介をしろつて言つてるのよ」

「自分が何も出来なかつたからつてビリビリするなよ」

「なによ?」

「なんでもござーません」

ハンカチで口を拭き。こほんと咳払いをして。分数は自己紹介を始める。

「風紀委員本部所属、第一七七支部臨時所属の木原分数だ。能力はフェイズセキュリティ確率操作、大能力者だ。レベル4。こうして会つたのも何かの縁だし、これから頼つてもいいんだぜ後輩」

ニヒルな笑みを浮かべて彼はそう言うのだった。

とある木原の交流関係

夏休み前の休日。風紀委員の支部の活動は本部の仕事を優先するため休み——という体裁で支部の活動をサボっていた。

そろそろプランの中枢を担う者達が活動を始める。能動的ではなく受動的に行動させることになるが、そんな違いはプランには関係ない。過程ではなく、結果が大切なのだ。

「こちら木原何か用か？」

高校2年生の分数としてではなく、木原としての科学者として行動する為の自己暗示を含めた言葉で、掛かってきた電話を出す。

木原としての性質は捨てたと自分では言っているのに、この様に意識の切り替えに用いている自分に嫌気が差す。

『確率操作、そろそろ幻想御手レベルアップの使用数が目標数に達する。そちらは手筈通り頼む』

電話の向こうの相手は巷ちまたを騒がせる幻想御手の首謀者であり、木原はその手伝いをした協力者であった。

風紀委員としての身分を知っている相手は、こんな事に協力しているのかと思いましたが。だが、木原によって安全性が高められた幻想御手は障害の残らない一時的な意識不明、及びその際に病院に運ばれるように仕組まれている。

なによりこれは、将来的な計画の中で大きな役割を担うモノを作るために必要になる。その為には能力を使った事による得られる感覚が何よりの重要であった。

「分かりました。監視の目をそちらに向けさせる為に、大立ち回りを依頼する事になりますが大丈夫ですか？」

『その位十分承知だ』

「ならば何も言いません。頑張ってください」

避暑のために貸し切りの室内プールで一連のやり取りを終えた木原は脇のテーブルに置いた飲み物を飲み干す。

「へえ。十で神童十五で才子二十過ぎれば只の人なんて言葉もあるけど、言葉通りになったわね」

「うるせ」

空になったコップを声を掛けてきた女性に投げるが、能力によって防がれてしまう。予めそうなる事を分かっていたため、悔しがる事なく木原は携帯を弄り始めた。

「あの時の狂犬みたいだな木原はどこに行ったのやら、今なんて只の学園都市の犬じゃない」

「学園都市の最たる例暗部にそう言われる筋合いは無いんだけどね」

「随分言うじゃない？ 殺やる気？」

「数多の野郎と同じ台詞になって癩だが、誰が麦野の能力開発をしたと思ってる？ そんなに自壊も辞さないハチャメチャな能力なんざ、演算一つ狂わせるだけで死ぬぞ？」

舌打ちを残し、麦野はラッシュガードを脱ぎ捨てプールに飛び込んだ。防水携帯のため真正面から水飛沫を受けながらも、携帯をいじり続ける。

「結局麦野も木原も子供なわけ」

「やつぱりぶそくだ」

「滝壺さんの言う事は超本当だったんですね」

麦野に続いてフレンダ、滝壺、絹旗もプールサイドにやって来る。店員に持って越させた水を飲み、そろそろ帰るかと呟く。

「私たちが来たからって帰るつもり？」

「元々アイテムの名前を騙って借りてたんだ、本人たちが登場したら居なくなるのが筋だろ？」

「結局それを知っててあえて言ってるんだけど」

「媚を売るなら相手くらいちゃんとした奴にしろよ。俺なんぞに売ったところで見返りなんか無いぞ」

自慢の脚線美を見せつけるようなビキニを着たフレンダは木原の座るビーチチェアに共に腰を掛ける。顔を顰めて離れようとする木原を掴み、あまりない谷間に腕をくつつける。

「んで、何が欲しいんだ？」

「そんな風に折れるんなら、結局最初から素直になるのがおすすめてこと」

「何様のつもりだ？」

「誰もが羨むフレンド様って訳」

「フレンドは超ビッチだったんですね」

「大丈夫だよ、ふれんだ。私はそんなふれんだを遠くから見守ってるから」

何だかんだ面倒臭がって逃げるのを諦めている内にフレンドだけでなく、他の二人にも囲まれてしまっていた。

アイテムは美女揃いだ、大抵の表の男は簡単に落ちてしまうだろう。だが一度裏に堕ちた者は恐怖し、裏にどつぷりと浸かっていた木原にとっては良く絡んでくる子供に過ぎなかった。

額に手を当てため息を漏らす。

「んな風に心配しなくて、俺は麦野を殺したりはしないさ。俺が最後まで面倒を見てやれなかったってのも負い目としてあるからな」
「随分と麦野には超優しいんですね」

「まあ、暗部と決別しない限りは、最終的にどうするかは分からないけどな」

三人に囲まれ面倒になった木原は能力を使いこの場から離脱した。

ちやうどその時を見計らって、プールから上がってきた麦野は髪をかき上げ皆のもとに歩いて来る。

「……あのバカ何か言ってた？」

『アイツは俺の大切な人だ。一生大事にする』って言ってたわけ」

「はあ？」

どうも二人の間に何かしらの甘い話があると信じて疑わないフレンドの戯言に、髪をかき上げた手を額に当てため息を漏らす。その姿はさっきまでいた木原と同じであったが、そこを指摘すると極太のメルトダウナー原子崩しが照れ隠しとして飛んでくる為、全員が声に出さないように努める。

「やっぱり最近の木原はつまらないわね、昔なら引っ付きに来たフレンドの上半身と下半身とが泣き別れてたわ」

「えっ？」

「そんな事も知らずにやってたんですか。超馬鹿ですね」

恐怖で体を震えさせるフレンドを尻目に、話に加わっていない滝壺はプールで力を抜いてプカプカと浮かんでいる。

フレンドが木原と会ったのは、木原が『木原を辞めた』と自称してからだ。

木原特有の『実験に際し一切のブレーキを掛けず、実験体の限界を無視して壊す』方法に無駄を感じ、実験体を浪費する実験を止め、別の方向へとシフトさせた分数は木原一族から除名された。

などと虚実入り乱れた事を言う前の木原は、木原の中の木原。『確率』と『境界』を司っていた彼は、邪魔者ならば善悪構わず殺し、世界は自分の為だけに廻っていると真顔で謳っていた。

「今となつてはそんな面影消してるつもりだけど。張り合いがなく、こつちまで調子がおかしくなる」

丸くなったように見える木原。だが麦野はその裏に隠されている、昔よりも濃い闇があると考えている。



「そんな姿でここを訪れるなんて中々ユーモアが効いているじゃないか」

木原が海パンに薄手のパーカーのまま離脱した先は、学園都市第七学区に存在する窓のないビル。

部屋の中でビーカーの中に逆さに浮かぶ、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』を前に普段と変わらない表情を浮かべる。

男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも聞こえる声で木原に話しかける。

「そろそろプランが本格的に動き出すと思つて、何となく声を掛けようと思つてさ。自分は動かないけど、学園都市の中を結構引つ掻き回すんでしょ？」

『人間』が静かに首を縦に振る。

「俺は俺でアレを制御できるように一人でやってるさ。もしプランの

邪魔になるようなら言ってくれ」

「君のそれは、最初は私のプランとは大きく道を違たがえているが最終的には交わり合う。君がイレギュラーな事だと考えた所で、それもプランの内になる」

「それなら重畳、いや僥倖か。16年間科学ばつかの知識を詰め込みまくったせいで、随分と考え方が凝り固まったから魔術なんて物を学ぶのは楽しみなのさ。随分前に習ったのは魔術以前の話だったからね」

「それは良い」

互いに口元だけを歪ませ、笑みを作る。

「ミサカネットワークにおける演算を確認する第一実験もそろそろ結果が出る。そのついでに良く分からないモノも出てくるそうだが、対処はどうするつもりだ？」

「本来ならば超電磁砲レベルガンを宛てがって、今の實力を見ようと思ったのだが、止めた。君の能力がどれくらいのものか見せてくれ」

「分かったよ」

これで幻想御手から始まり、禁書目録インデックスと邂逅する事が許可された。これでまた目的に近づけることだろう。

「次に用事がある際は私から連絡する。それまでは待つのが良いだろう。これから私への客は増隣えるだろうから」

「了解。ソレじゃまたな協隣力者」

「ああ、私の協対岸の力者」

而しかして魔術と科学が交差し、複雑に絡み合う話に一石を投じるべく自らも死地へと足を運んでいく。

とある魔術の禁書目録

七月二十日。学園都市では夏休みが始まった。一部生徒を除き、能力開発から解放される期間だ。ジリジリと肌を焼く太陽にも負けず、学生は街へと繰り出す。

科学の都市——学園都市に似つかわしくない修道服をきた真っ白な少女が街を歩いていた。太陽の光を浴びてキラキラ輝く銀髪は、普段身につけているベールが無いため風に煽られすれ違う人の目線を集める。

本人はきよろきよろあたりの建物を見渡しているため、そんな視線には気づいていない。

「誰か見てる？」

だがそんな目線とは違う何かを感じた。

これまで自分を追って来た魔術師と同じ様な、こちらの様子を一手一投足を伺っている目線。息をするのも苦しくなる。

今朝会った少年によつて、彼女が身に纏う修道服は『歩く協会』から『針のムシロ』アイアンメイデンに変わってしまったている。

出来れば敵対せずにとかしたい。魔力を感じないため、魔術師ではない。となればこの街の人間という事になる。

「そつちから路地に入ってくれて助かった。俺が声を掛けるのはあんまりよろしくないからな」

「やっぱりこの街の人なんだ」

「ああ。ようこそ科学の総本山、学園都市へ。歓迎するよ禁書目録」インデックス

迎えたのは木原分数。科学の民でありながら魔術を知る、科学側からの使者だ。



「あなたが私を学園都市に導いてくれたって事でいいのかな？」

「その認識でいいさ。あと名前と呼んでくれて構わないよ」

「分かったんだよ、ぶそく。学園都市としては魔術世界の一角を担うイギリス清教と事を構えるのは不味いんじゃないのかな？」

二人の姿を見るのは、この街を漂う滞空回線のみ。他の如何なるモノを排除する様に設計された完全個室な密室で、インデックスはご飯を食べながら会話をしている。

小さい身体にどこまで入るのか挑戦中というほど、バクバクと食べ続けている。ある程度までの食料の備蓄はあるが、この勢いで食べ続けると底をつくだろう。

「そこは別に気にしなくていいさ。今のオマエは学園都市が正式に招いたゲストさ。その行為自体を非難する声があったりもするが。まあそんな状況でも、オマエに手を出したら世界的に叩かれるのはあつちのほうさ」

「随分と大きく出るんだね」

「大事な場面だからな。勝負をする時はリスクなんか気にしないもんさ」

インデックスの食べっぷりに、見ているだけでお腹が満たされる。水を飲むだけの木原は飾らぬいつも通りの態度を貫く。

アレイスターを通して魔術世界の情勢についての知識も、インデックスについての知識もある程度は持っているつもりだ。

「でだ。お客さんにはそんなぼろぼろな服を着てもらうってのは如何なものだと思っわけだ」

「たしかにそうだね……」

インデックスが着ている歩く協会——今となってはだった物と付くが、は安全ピンによって何とか服としての体裁を保っている。そんな服装をさせるのは悪い。

仮に歩く協会を縫直した所で、それはただの修道服でしかない。歩く協会は布地の織り方、糸の縫い方、刺繍の飾り方、あらゆる要素が計算され作られる事で法王級の強度を持つ。

今の現状では、魔力の残滓によって見つけられる為だけの発信機でしか無い。

「だから服買いに行こうぜ」

「ねえ本当に普通にしていいの？」

「おう。目的はデパートで服を買うことだけど、何か気になるものがあつたら何でも言いな」

「色んなものがあつて、目移りしちゃうんだよー」

大衆向けの店が多いセブンスミストまでの道中でさえ、外の間人であるインデックスには全てが物珍しい。

無機質なビルが立ち並ぶ様。何も看板を出さない物もあれば、看板を出しお店が入っているビルもある。露天で商売している人もいる。

「この街つて学生以外にも人がいるの？」

「大人が排除されるような子供の国つて訳でもないしな。7割が学生つてことは、残りの3割は大人つて感じだ」

「大人の人も超能力を開発してること？」

「いんや。超能力開発つてのは学生くらいの脳じやなきや出来ないんだ。原理は難しいから説明は省くけど。街にいる大人は研究者だったり、企業を経営したり、そんな人達に飯を作ったりしてる。学園都市を運営しているのは大人だしな」

勿論、今は夏休み。制服姿や私服姿の学生が殆どだ。インデックスのシスター姿は確かに目を引くが、学園都市の学生は何かの実験の最中と思つて気にも止めない。

「例えばビルの場合やお店の配置。それにも人の視線の動かし方や、心の様子によつてどこに注目するか、とか色んなものを調べるための実験的意味合いが含まれてる」

「能力開発だけじゃないんだね」

「んな事してるなんて外の人は思わないよな」

「うん。耳にするのは超能力者が居ることだけ。徹底した情報管理だね」

「この超能力開発以外の技術は外の何世代も先を行つてるから、変に外に流出したらパニックになるし」

ミスディレクションや視線誘導。深層心理への働きかけなど、小さな町位なら簡単に支配下に出来てしまう力がある。だからこそ情報を外に漏らさなければ、人も外へは漏らさない。

絶対に無いとは言い張れないが。

「あれ食べてみたいかも」

「了解」

露天で売っているケバブ——新開発のシステムでお肉を美味しく調理！　と大きなのぼりで宣伝するのは大きな効果があった。

買い食いの露天は、並ぶ客の長さや早く商品を渡す両方の反対の要素が大切となる。人気があると思わせる列の長さや、不満を感じさせない商品が手に入るまでの時間。

そのどちらにも能力開発で培った知識を利用している。

「超能力と魔術の違いってあるだろ？」

「そこまで知ってるんだね。うん、端的に言えば才能があるかないかだね」

「ああ。ここでは才能を持っている奴に電極やら薬やらを使うことで、才能を表に人工的に出してるわけだ」

だからこそ科学と呼ばれている。

才能持つモノを才能有るモノへ。

「と言っても全員が全員、超能力に目覚めるかと言われたら否だ」

「とうまがいつてたんだよ『半分くらいは脳の血管が千切れるまで気張ってようやくスプーンが曲がる程度』なんだって」

「その通りだ。流石は完全記憶能力だ」

科学の超能力について話し終えるのと同時にケバブを食べ終える。

木原はポケットからハンカチを取り出し、インデックスの口元を拭く。

「ちよつと締まらなかつたけどな」

「むう」

「歳相応で似合ってたぞ。リラックスの証拠として受け取っておくよ」



「こんなを買ってもらっちゃっていいの？」

「似合ってたから買ったんだ。それに多く買っても困ることは無い

さ」

一先ずは、今インデックスを狙う二人組の撃退が出来るまでの期間インデックスを学園都市で保護する事、をインデックスは了承した。今は今朝上条の家忘れて来たボールを取りに行く最中だ。学生寮が多くなり、商業ビルが少なくなる。また、風の流れを考慮しながら設置される風力発電プロペラも、生活の邪魔となる為少なくなっている。

「なあインデックス」

「なに？」

「何でこんなに人が誰一人として居ないんだ？」

買い物をして夕日が差す時間になったからと言って、今日は夏休み初日。学生が誰もいないなんてことはあり得ない。

「もしかして、人払いの魔術……？」

「流石です、インデックス」

それは気配もなく顕れた。

瞬きの一瞬。そんな刹那とも言える時間に彼女は二人の目の前に顕れた。

「コイツがオマエを探してる奴か？」

「うん」

「ほお」

インデックスを背中に隠し前が出る。その態度は普段と変わらず、平常心。全てを見透かしているような目は未知との遭遇によって心なしか輝いている。

女性はTシャツを胸より下、へそが見える辺りで巻いている。下は片脚だけを大胆に切ったジーンズ。

そして常軌を逸する日本刀。

「その娘をこちらに渡してください」

「こちらのゲストを『はいどうぞ』って簡単に渡すわけがないだろ」

魔術への対抗策は幾つか練っている。アレイスターから聞いた話で想定出来、対処出来るものには限るという制約が付くが。

「幻術とか使ってくるか？」

仮に姿を現しただけで何かをしてくる場合、彼はもう対処出来ない。能力を使い、この場を完全に混沌に落とす事でしか乗り越える事は出来ない。

その様な行動を木原は対処とは呼ばない。ただの力技でしかない。「ううん。この人は使わないよ。使うのはもう一人かも」

「となると上条の方が」

インデックスと接触をしたのは木原を除いて上条だけ。ましてやベールが部屋においてあるとなれば、魔術について知られたと思うことだろう。

今朝から今迄に上条と木原について調べてからの接触。この短時間で可能だったということは、学園都市内に関係者がいる事は木原には分かった。

「だとしたらどうしますか？」

女性は刀に手を当てる。

「物騒だな」

「最終警告です。インデックスをこちらに渡してください。手荒な真似はしたくありません」

「心の余裕持って行動しな。余裕のなさは視野狭窄を招くぞ？」

携帯を取り出しインデックスに投げ渡す。

「先ずは上条と合流するのを優先しろ！　その地図通り行けば着く！」

「ぶそくはどうするんだよ!？」

「まあ何とかなるさ」

インデックスは幸運にも一切の攻撃を受けず、迷わず上条と合流する事が出来た。

「イギリス清教の聖人って、魔術側との初戦は随分とビッグゲームが相手になったな」

「先程の口調からもしやとは思っていましたが。やはり私の事を知っていましたか」

「当然だろ？ そっちが俺や上条を調べる時間があつたんだ、伝手さえあれば同程度の情報は手に入るさ」

インデックスはここから離脱する事に成功した。インデックスは科学と魔術が完全に不干涉であり、それぞれの領域については無知であり、不干涉である事を前提としている。

そんなインデックスにほんの少しとはいえ、それぞれの暗部を見せるのは躊躇ためらわれた。戦いの最中に質問されるのを嫌ったという点もあるのだが。

「聖人——神の子の偶像崇拜なんてものでどの位強化されてるかとか考えていたんだが。どうやら馬鹿に出来ないものらしいな」

しばらくの間『木原』から離れていたが、身体の構造についての見識は頭にこびり付いている。破かれたジーンズからスラリと伸びる脚は、これまで見た中で最高峰の物だ。

爆発的な力を出しながらも、高速での戦闘にある程度の時間耐えられるようにと持久性を持たせている。並の鍛錬ではこれ程の筋肉は身につかない。

「身体に溢れるよく分からない力。天使デレスマの力って言うんだっけ？

AIM拡散力場に似てるから存在してるって事は認識できるが、随分と大量にあるじゃないか。聖人だからか？」

魔術側
「こちらの技術の詮索ですか？」

「悪いな、つい考えてることが口に出ちまう。」

またこれだため息を吐く。

いつまで経っても消えない悪癖に嫌気が差しながらも、対人の際は重宝する。これまで何千何万という人を見てきたのだ、一連の会話で

今回の相手が酷く真面目なことが分かる。

「というか、さっさと手をだしたら良かったじゃないか。俺のくだらない戯言なんかを聞くよりも、魔法名を名乗ってぱつと倒してインデックスを追うべきだろ」

「私達はあなた達と敵対する事は望んでいません。出来るだけ穏便に、インデックスを……回収したいだけです」

「なら、俺を素通りして追えばいいだろ？」

「そんな殺気立った目で見て来る相手に背を向ける事はできません」

科学と魔術どちらが先に手を出すか、それによって他の勢力の印象が大きく変わる。ましてや科学の本拠地、学園都市での表立った魔術との衝突は初めてだ。世界中が注目していると言っても過言ではない。

「つまらないな」

だからこそ、そんな程度のしがらみに行動を——自分の信念を曲げてしまう神裂のことを、どうしようもない愚者だと思った。

現に神裂は木原に集中しながらも、インデックスが行った先を気にしている。

魔術側が手を出してきた方が角が立たず、後処理が楽だからと受け身の体制になっていたが、このままでは何もせずに睨み合ったままだ。

「ちっ」

結局その場はただ互いに牽制し合うのみで、それぞれの相方から連絡が来るまでそれが続いた。

◆ この出会いに意味があったのかと聞かれると難しい。だが木原の目的が魔術側に、科学の者でありながら魔術を知っている者がいる、と認識してもらおうことであつた現状としては大いにあつたと言える。う。

ではどうしてこのタイミングなのか、と問われると答えは一つだ。全ては『プラン』の為。プランが無ければ木原は殆どの事件に全力を尽くしただろう。

例えば禁書目録の件インデックス

例えば幻想猛獣の件AIMバースト

例えば吸血殺しの件ディープブラッド

いずれにしても、皆が納得し満足する結末へと導ける程の力を持っていた。

だが、それぞれの件にほんの少しばかり関わっただけで中核へと至る事は無かった。

「木山春生との契約も終了と。データは然るべき時に送るとして、そろそろ俺も大きく動きたいよな」

現状、メインプランはほぼ全て流れが定まっている。そこに横槍を入れれば、流石の自分でもアレイスターから何かしらの嫌がらせがやってくる事は理解していた。

となると、出番になるのは昔から温めておいた人物。前もって人脈を作っておいた、アレイスターとのプランではスペアプランだが、木原単独のプランではメインを張る大物。

他の何処とも関わりを持たず、木原が手を付けても何処からも文句が入らない人物。

「俺だ、垣根に近い内に遊びに行くって伝えといてくれ」

レベル5の影には『木原』が存在する場合がある。第一位アクセラレータには木原数多が。第三位超電磁砲レベルガンにちよつかいを掛けようとしている木原幻生。それに伴い第五位心理掌握メンタルアウトも多少は関係しているようである。

あの爺は邪魔だ。百害どころか千害位面倒事を持つてくる。近々徹底的に叩きのめしたいと考えている所だ。

閑話休題

第四位原子崩しメルトダウンは木原分数が関与していた。だからといって駒として利用できるかの答えは否だ。

当時は『木原』としての教えを貫き、その全てを持って最高傑作と呼ばれる程まで下地を作り上げたが、如何せん、木原分数自身を麦野の自分だけの現実パーソナルリアリティに組み込んでしまっている。

乱暴性と他者を気にしない豪胆さはここに由来する。さらに、現状

において自分だけの現実の木原と現実の木原は大きく乖離している。それも不安定な能力を更に不安定にさせている要因である。魔術に対しても絶対的な破壊力がある点では有能だが、精神的な脆弱さが選ばれない理由となった。

「俺の名前を出せば殺されはしないさ」

第六位は言わずもがな、第七位もこちらの思うように動くわけがない。

「となると、残ったのが第二位になる訳だが。それは只の後付の理由にしかない」

仲介役との電話を切って一人ごちる。

第二位未元物質データマターの能力は非常に魔術と相性がいい。木原病理が狙っていると言ったことはある。しかし、それは垣根の人格が無くなって能力だけになった際のものだから懸念事項とはならない。

「木原の裏切り者が干渉してるとかで肅清はされない……よな？」

木原の手法を取ってないし、うん」

肅清が怖いわけではない。肅清しに来た刺客に対応する為に意識を割くのが面倒なのだ。

「さてと、パーツの1つ目はこれでいいとして。残りはどうしようか」

科学本と魔術原の半端者分

科学垣の能力者根

最後に魔術側のピースが欲しい。

第1章 認知 (Perception)
降臨または落下

「そつちも忙しいのにありがとう」

『私とあなたの仲じゃない。それに私の改竄力を簡単にできちやうから』

「貸し^{いち}一つてことで、何かあつたら言ってくれ」

『わかったわあ。とつても大切な仕事があるから、その時お願いするわね☆』

「ああ」

『さつきから後ろが騒がしいようだけど、大丈夫かしら?』

「俺が垣根を連れて行くのを阻止しようとして、コイツを寄越したらしくてな」

「よけんなあ!!」

放たれる原子崩しを半身逸らすことでかわし、余裕綽々の様子で会話を続ける。

「まあここさえ乗り切れれば後は直ぐさ。夜遅くなのにごめんね」

『はあい。がんばってねえ』

携帯をポケットに仕舞い込む。

そして相変わらず、子供が見たら泣き出しそうな顔をこちらに向けている麦野を見る。

「なにかしら?」

「何年経つても変わらないなと思つてさ」

アイテムにいる時は見せない、偶に仕事で木原の妨害をする為に現れる際に見せる表情だ。初めて会った時はこちらの様子をうかがつて、ツンケンとした態度だった。が、そのような態度は時が解決し、年下ながらも木原に頼る事が多くなった。

どれだけ顔が大人びて、体が魅力的になっても変わらない。

構つてほしい、愛されたいという表情は。

「ちっ」

「だから、俺はそれを他のやつにも知ってほしいって思ってるんだ」
ポケットで操作をした画面を麦野に見せる。

同時送信で送られたメールには、何処かで見た少女が写っていた。
そしてプルプルと麦野の携帯が鳴る。木原に攻撃する意志がない
と分かると、携帯を開くとメールと着信が来ていた。

「なによ。こっちは任務中よ」

『結局、麦野は強がってても昔は可愛かったってわけね』

「はあ?」

『メール超見てください』

絹旗に言われるままメールを開く。差出人は目の前にいる木原、
そしてメールに添付された写真を見る。

「ななななによっ!!」

かつて能力開発を頼まれた木原は、麦野の自分だけの現実の構成の
結果に満足し、麦野を次の研究者に任せることにした。だが、それに
納得出来なかった麦野は大好きなぬいぐるみを抱いて大泣きした。

その時に撮られた写真だ。

「木原分数ウウ!!」

特大の原子崩しを木原に撃とう、照準をつけようとして気づく。木
原がその場から姿を消していた。

◆ 「ちっ。時間を取られた」

ここ最近位相が揺らいでいる。衝突とは違う、今まで経験した事が
無い事象だ。可能ならばその現場に垣根を連れていきたい。

別の位相からこの位相へ何か落ちてきそうになっている。木原
の能力を使っても分かるのはその程度のことであった。

「会って最初の言葉がそれかよ」

麦野から離れ、辿り着いた部屋の主が不機嫌そうな声をあげる。

「時間がない。外から一切干渉されない物質を作れ」

「はあ?」

「あと数十秒で完成させろよ」

急速に何かがちちらの位相へやって来ている。バカでかいエネルギーを持つているソレがやって来れば、この位相は大きく乱れる。

対処するにはこの影響を受けないようにしなくてはならないのだ。

木原に命令され、少しイライラしながら能力を発動し——真つ白な羽を生やし、指示通りの未元物質で部屋を埋める。

完了した刹那、部屋が大きく揺れる。

「なっ！」

「ギリ間に合ったか」

部屋の外にあつた自分が作り出したモノが消失し、この部屋が何かによって攻撃された事を理解する。自分達がいる部屋以外が大きくズレたことを。

木原は安堵する。なんとか間に合ったことを。これからのプランに大幅な変更が要らないことを。

「今のは何だ？」

「別のところから何か落ちてきた、つてのが真実なんだけど。納得できるわけないよな」

ここから先は魔術の領域だ。そんな科学と真反対の物を信じさせる為には、言葉を幾重も紡ぐよりも本物を見せた方が納得するだろう。

「取り敢えず外に出るか。そうすれば何か説明できるものがあるかもしれないし」

「今話せ」

部屋の扉を開け、自分の予想通りに世界が変わっている事を確認した。外に出るように提案し、垣根を振り返る。

そこで目にしたのは、真つ白な羽を広げ臨戦態勢を取る垣根だった。

「まじかー！」

レベル5なんて化け物が自分の思惑の中で動かせない存在であることを木原は忘れていた。先程麦野の件で体験していたのに。

◆ 次の瞬間、ドンツと建物の一角が崩壊した。

「ちっ」

手応えが無かった。それどころかこちらの方が後手になっていと舌打ちをする。相変わらず先手先手を打ってくる木原に苛立ちを隠せない。

なんせ、攻撃が当たる前に木原の姿が目の前から消えた。そして視界がクリアになる前に、別の場所へと移動させられた。

かすかに揺れる室内。そして静かだが耳に届くエンジン音。ここが車内であることは簡単に分かった。

「レベル5つてみんなこんな感じなのか？」

自分だけの現実を確固たるものにするために、我^がを強くする影響でレベル5は性格破綻者と呼ばれる事はある。それでも普通にできる者もいる。

だが、最たる例である第二位第四位と連続で会うとなると、愚痴をこぼしても仕方ないだろう。

「盗聴するやつが居ない所で話したかったからなんだが、こんな事になるなら話しときや良かった」

「早く言え」

「さっきのは『魔術』、俺たちとは違う方法で現実^に干渉する技術だ」

「はあ？　ふざけてんのか？」

「だよなあ。そうくるよな」

ゆっくりと噛み砕いて、理解へ落とし込むつもりだったのだが、今となつてはなんの意味をなさない。いきなり魔術の存在を突き出し、てもこんな反応にもなる。

「百聞は一見に如かずだ」

車に備え付けたテレビをつける。日本は時間帯は深夜だが、海外は昼間のところもある。生放送をやっているイギリスの番組をつける。

画面には様々な人種、様々な年齢の男女が行き交っている。それも、ありえないくらいに統一感がない。

「なんで、子供がキャスターをしてやがる」

他にもおかしな点がある。キャスターの脇を通る道路で信号待ちをしている運転手は齡90近い老人で、少年と少女がバカップル顔負

けの雰囲気醸し出している。

「こんなのが今世界中で起きている。学園都市の中だったら、またイカれた実験ってことになるが。今回はそうはならない」

「ちっ」

「なに。目的地までは長いんだ、ゆっくり説明するよ」

科学で最も魔術と性質が似ている垣根に魔術の存在を伝える。魔術と科学の不可侵の線を超える行為だが、そんなものは関係ない。

どうせ裏や闇の方では知ってる奴らがいるんだ。触りじゃなくて、存在や成り立ちを伝えるだけでは大きな問題にはならない。

遭遇もしくは出現

8月21日。その日は上条にとって波乱の一日だった。一週間前の一方通行と戦った時と方向としては逆の、いわゆるギャグの様な嵐に巻き込まれて疲れていた。自分の知り合いが自分の親族だと名乗り(父親は除く)、海の家店主もたった一日で別人に入れ替わっていた。

そこにダメ押しのように、隣人^{土御門}が魔術師であったり、入れ替わりの原因がよく分からない魔術だったり、コメディイとシリアスの合わせ技に辟易していた。

「問一。貴方がこの術式の術者か」

頭の中を整理したく、一人で海辺を歩いているとふと声が掛かる。幼く若い声に上条はそちらを向く。

初めて見る少女だった。緩やかなウェーブの掛かった長い金髪、目が見えなくくらいに切りそろえられた前髪。そして異様な衣服。インナースーツの上に拘束具を着込み、その上に外套を羽織っているだけの姿。

上条当麻は経験則で知っている。

誠に遺憾ながら、この様な奇抜な格好をしているのは大抵記憶を失う前の自分の知り合いである事を。

赤髪の神父に、裸アロハシャツ、そしてジーンズを片足切り落とした物を履く人らが知り合いなのだ。この少女のような子が知り合いでもおかしくないと考えてる。

「よ、久しぶり！」

「再度繰り返す。貴方がこの術式の術者か」

「あれ、上条さん選択肢間違えた？」

「質問に対する答え出ないと判断。返答が無いため肯定と捉える」

拘束具に取り付けられたボールを取り出し、振りかぶる。しかしボールは上条に当たるといふ所で止まった。

既に人払いをした筈のこの場所に入ってこられる者は魔術師以外にありえない。

「そつちがこつちを襲うのは問題になるらしいぜ」

「問一。貴方の言う『そつち』と『こつち』の意味はなにか」

「おい木原。お前、この指示語で伝わるっていつてたじゃねえか。この金髪のお嬢さんが分からんって顔してるぞ」

「あれ？」

◆ 科学側からの来訪者が二人やって来た。

「うにやー！　木原先輩も登場って、なんだか凄いことになりそうだにやー」

「まだそのにやー語は続く雰囲気なのね」

上条と合流したらイギリス清教の二人も現れ、それぞれが意見を持って話し合う場が自然と生まれた。自己紹介も終わり、これから本題へと入っていく。

「まあいいか。俺とこいつは、外へ出てった上条を護衛と監視する為に学園都市からやって来た」

「あまりにもタイミングが良すぎる気がします。まあ良いでしょう。少なくともこの少年に危機が迫っていると言っても過言ではありませんし」

今、世界中で起こっている入れ替わり現象。その渦中に上条は不幸にも放り込まれてしまった。

「あなた方はこの現象、私達は便宜上『御使墮し』と呼んでいますが、この現象を防いだという事でいいのですか？」

一 際厳しい目で詰問をする。

もし防いだとするならば、魔術を使ったもしくは術者その者かどちらしかあり得ないと考えているからだ。

「防いだは防いだけど、たぶんねーちゃんが考えているのは的はずれなんだぜい。その垣根は学園都市の第二位だにやー。俺たちみたいの前触れがあつてからなら防いでもおかしくないにやー」

「前触れに関しては、俺が垣根に教えた。多分だけど俺たちも他の奴らからしたら別人に入れ替わっているはずさ」

垣根は上条を見る。憎い第一位を倒し、アレイスターのメインプラ

ンになっている男が、こんな普通の少年なのかと心の中で値踏みする。

「ちなみに俺は科学側で魔術を成り立ちから原理まで知ってるどっちの勢力しても迷惑な存在だ」

「迷惑って意識はあるんだな」

「口出しはNGだ。んで、垣根は魔術っていう科学とは違うシステムで起こる物がある程度の認識しか無いから情報の流出は気にしないでいい。超能力者が魔術を使う副作用も説明したし」

科学側だけど魔術を知っている。けど存在だけだから、使う可能性は気にしないでいいよ、という暴論を放つ。信頼関係が成り立っているならばまだ許されそうだが、現状では到底受け入れられないだろう。

「分かりました」

「わかったにやー」

だがそれがまかり通る仕掛けがある。

学園都市の中では他への影響を無視すれば、ほぼ無限に使える。しかし外では一回しか使えないとっておきを使った。

それだけ垣根がこの場にいるのを大切だと考えているのだ。

「あれ？　いいの？」

その策が通らない者が一人取り残された。



「クソ！　どうして俺がアイツに見えてんだ!？」

「アハハハ！　絶対何か悪いのに憑かれてるって」

海の家わだつみに戻ると、サーシャを除く4人が上条一家と出会った。上条の友達と言う事で紹介されたのだが、それぞれが癖のある人と見た目が入れ替わっていた。

土御門元春はひとついはじめ「――へ」

神裂火織はステイルⅡマグヌスへ

そして、垣根帝督はと言うと。

「一方通行アクセラレータになってるとかふざけんじゃねえよ」

「日頃の行いが悪いからなあ」

「木原先輩、この人第二位なんだろう？ そんな言葉づかいでいいのか？」

若干青筋を立てながらキレる垣根第二位に自然な態度で煽りを入れる木原に、先週、一方通行第一と対立した上条は肝を冷やす。

あの圧倒的な力の前に勝ち星を奪い取れたのは、珍しくも幸運だったからだ。もしその場にいた人の数が足らなかったら、一方通行が能力に頼らなかつたら、様々な条件が揃ったから上条当麻は勝つ事が出来た。

それが普通だ。

「あたしは平気だって。垣根とは長い付き合いなんだし」

「他の奴からはお前が女に見えてるからいいけどよ。俺達からしたら男のまままでその口調だと、長年の付き合いとかなしで殴り飛ばしたいんだが」

「それは男子力が低いぞ☆」

見た目が金髪クールな外国人女性になった木原は、そう言われた瞬間に別の人を真似る事でその場を乗り切った。乗り切った今も何処から誰が見ているか分からないから続けると言ったが、案外面白いからが理由だ。

「位相が揺らいでこんな事になるなんてのは稀も稀だ。原因不明、科学側だから下手に探れないの現状だと楽しむのが一番だ」

「見た目も変わってるならまだしも、木原先輩も垣根さんも俺からしたら変わってないからな」

自分と同じ状況な相手は本人のまま認識でき、違う状況の相手は入替わりイメージプレーカーが生じていると認識する。ただし、幻想殺しという例外は除く。

位相と深い関わりを持つ超能力を持つ木原だから分かることだが、天使が落ちてきた事でこの世界の位相が僅かに2つに分かれた。

防御できた者はそのまま留まり、できなかった者は僅かにずれた位相へ移動させられた。割れたガラスを通して見るように、見た目がズレる。

だから映像で今を流している場合は入れ替わりが生じ、録画や写真

では入れ替わりは生じていない。

「俺と垣根は海の家で夏休みを謳歌するから、上条は解決に向けて頑張ってくれよ」

「お前と一緒にいるとか、心が疲れるから無しだ」

「けど他にすることないよ」

様々な施設が存在する学園都市ならいざ知らず、クラゲが大量発生した海では遊べなく。せいぜいビーチボールや砂遊びが関の山。

それを分かっている木原はニヤニヤと、女性に見える人からすると艶美にみてるような笑みを浮かべながら上条たちの方を見るように、後ろ向きに歩いている。

突如廊下の電気が消え。上条と垣根が歩みを止め、それに倣い木原も後ろ向きに歩くのを止める。光源は微かに差す月の光だけ。

「どうやら電気が消えたのはここだけはない様子で、先程までいた居間と店主がいる台所から「電気が消えた」と声があがる。」

「停電？」

「ブレーカーが落ちたんだろ」

「さっきこの建物を見て回ったけどブレーカーが落ちる位使われてるって様子はなかったが……ん？どうした？」

上条と垣根が目の前でパクパクと口を開けたり閉じたりしている。御使墮しの影響かと考えるが、位相のさらなる大きな変化は観測できない。

上条は目を見開き、垣根は両耳に指を指している。そこから推察できるのは。

「なるほどな」

レベル5と戦ってからもしもの時用に切っていた痛覚と自然な女性の演技をするために切っていた触覚のことを思い出す。触覚だけをもとに戻すと、両耳に違和感がある。

両耳に刺さっていた物を取り、目の前に持っていくとナイフだと分かる。それもただのナイフではなく、刀身に熱線が入った発熱ナイフ。刀身を持った手が熱で爛れている。

「どっか第三勢力が参入したか」

柄には『R・S・M』の文字が刻まれていた。

是か否か

「お前の体が代替技術の最先端だつてことは知つてても、耳に大穴が空くのは気色わりい」

海の家のお室で両耳をナイフでくり貫かれた木原に、特に心配する様子もなく言葉を投げかける。これまで数回木原の腕を飛ばしている垣根にとつては見慣れた光景だったが、治すところを見るのは初めてだ。毎回会うたびに生えている腕というのも気色が悪いものだった。なにせ、日焼けの仕方もきちんと再現されていた。

垣根から見て木原はこれまで会ってきた人の中で一番未知の存在だ。絶対にレベル4の木原では歯が立たないレベル5に、恐れる心を抱かず共に行動する人はこれまで現れなかった。

「今まで能力を使つて残酷な殺し方をしてる奴に言われる筋合いはないんだけど」

自分のなすべき使命を抱いている木原は、死ぬ可能性と隣り合わせでレベル5と関係を持つ。

例えば開発者の木原数多と既知の関係であるからと言つて一方通行に接触し。昔馴染みと言つて麦野沈利に会いに行き。共通の敵がいるからと言つて食蜂操祈とお茶を共にする。

「それにコレは代替技術じゃない。元々無かったり失つた器官の代わりに付けてるんじゃないやなくて、人が持たない性質を持たせるために付けてんの」

確率を操作できると言つても零をプラスにする事は、プラスをより大きくするよりも困難である。そこまで到達してしまえば彼もレベル5として認定されるだろう。

その零を僅かでもプラスにする為の技術。自分の体の殆どを全く新しいものに変えた。

「俺には関係ないから知らねえな」

「無知は罪だぜ。それに未知を操る奴が言うセリフじゃないだろ」

「うぜえ」

「未知といえば、このナイフに彫られていた『R. M. S』ってのは何

だ？」

学園都市から持ってきた鞆の中に入れておいた処置セットを使って縦に大きな穴が空いた耳を、スピアに付け替えた。

その原因を作ったナイフ。形状は変哲もなく、刃渡りも一般的なサイズだ。唯一不釣り合いなのは性能だ。

「明らかに俺を狙っていただろ」

「一般人にそんなもの使ったら普通死ぬからな」

「更にこの技術は外の技術より進んでる」

「となると敵は学園都市か」

しかし学園都市の技術よりも遅れていることは垣根には黙っている。学園都市と魔術協会とは違う第三勢力の存在を広めることを得策だとは思わなかった。

存在や目的が明確になるまでは心の中に秘めておこうと考える。

「んでそのオマエを襲ったやつ顔はどんなだった」

「今は御使墮しによって見た目が入れ替わっているから、あまり参考にならないと思うけど」

それもそうかと垣根は納得する。

暫くすると、ばたばたと大きな足跡と共に上条がやって来た。

「インデックスが火野神作ひのじんさくを見掛けたって言ってたけど、木原先輩が襲われたのってそいつか!？」

「インデックスちゃんが見掛けたなら、俺達が火野を見る事はないだろ」

「あつ」

「一方通行がこんなアホにやられたなんてな」

夕飯の時に流れていたニュースによると、28人を殺害した死刑囚。そんな人物がこの建物から野外に出たと聞いた上条が、先程木原を襲った犯人だと考えた。

最近非日常との接触が多くなったが、それでも今回のような日常がまるまんま非日常になるなんてことは平凡な高校生の精神を不安にさせ、視野狭窄を引き起こす。

その結果が垣根の辛辣な一言だ。

「ん？　木原先輩どうした？」

木原の目は暗闇の中でも犯人の顔を捉えていた。目の殆ど機能を自分で制御できるようにし、暗闇の中でも昼間のように見える目は確かに捉えていた。

見た人に精神的嫌悪感を与える身体を、ひしゃげた気味の悪い笑顔を浮かべる火野の顔を。

「あれは火野だった」

異なった影響下に居る兩人から『同一人物』に見える彼がこの魔術の犯人であると、改めて相談する必要は無さそうだった。



「これで火野を殺して終わりなら楽なんだけだな」

「やっぱり真相を知って黙ってやがったか」

海の家でかき氷を食べながら話す二人。

これから先は魔術の領域です、と火野の捜索に参加できなかった二人は一日暇を持て余していた。

「たしかにこれだけの為に俺を連れ出すなんて、リスクがあってもメリットがない。なら他に目的がある事くらい分かる」

「魔術の存在を認知しただけで、俺にとつては十分だけど」

「何年オマエに絡まれてるか忘れたか？　オマエは最低でも達成する目標と他にも数個目標を設定するだろ」

「まあね」

言い当てられた木原は拗ねたように言葉を漏らす。イニシアチブを獲られるのは嫌いだ。すべて見透かしたように振る舞うのが好きなのだ。

かき氷を食べ終え甘ったるい口の中をリセットする為に水を飲む。思った以上の効果は無かったようで、他に何かで誤魔化そうかと店の中を見て回る。

「そろそろ来るよ。心構えをしておいてね」

「分かってる」

「そのリミッターも解除するから存分に力を振るえ」

「随分と気前がいいじゃねえか。口を酸っぱく能力を使うなって言つてたわりによ」

アジトから車の中に転移させられた後に付けられたピアスの形をしたキャパシティードアウン。木原を名乗るが木原一族としての性質を持つていない落第者であるテレステイナーⅡ木原Ⅱライフライン、木原幻生の孫が作った物にしてはあまりにもお粗末過ぎる品物を嫌々改良したものだ。

木原一族の技術が出来れば流用したくなかった分数はテレステイナーを、小型化を諦めさらに機能を追加したり、精密な作りをしたり、分析を繰り返し細分化するなどの特色を持たない木原一族であると思ひ込むことで、今回の使用について自分の中で折り合いをつけた。

「外で使うだけの価値がある事が起きるのさ」

時は満ちた。

ミーシャと自分を語る他の位相から堕ちてきた天使。『神の如き者』であり、あらゆる天使の中で最も偉く最も強大な力を持つ『天使長』とされる存在。

木原はソレが姿を表すのを感じ、にやりと笑った

◆
アストロインハンド
天体制御

その名の通り星々を掌握し、意のままに操る事が出来る魔術だ。その影響は計り知れない。なにせ少しでも地球の自転や地軸、公転がズレるだけで人類は滅亡する。

人類には言葉遊びにしかならない事が、天使ならば実行可能となる。ましてや、被害を出さずにそれら全てを行えてしまう。

その結果の『夜』、自らの属性を強化するのに適した環境へと変化させる。遠くの星々を意のままに操作し魔法陣を作り出す。地球にその効果が及ぶように光の速度を変える。

言葉通り人間と次元が違う。足止めとしての役割を果たすだけでも息はあがり、聖人であっても天使には敵わない。己の身と心と魂に

自ら刻みつけた魔法名を解放しても、その身は天使の足元にも及ばない。

「天使つてのはここまで頭おかしいのか。自分に最も適した状況にする為に天体の操作をする魔術。それに伴う位相の軌轢からの火花は己の中に閉じ込めると」

「あなた達！　　どうしてここに!？」

ここは既に魔術が支配する空間。科学と民である二人が居ていいような空間でも、人間が居ていい空間では無くなっている。

未知の圧倒的な力を目の前に、垣根は無意識に笑みを浮かべる。

「早くここから逃げなさい!」

「それは出来ない相談だ」

垣根の言葉の次には『神の力』からの攻撃が襲い掛かってきた。背後の海の水を持ち上げ、神裂に斬られた翼を再生する。

再生が完了すると同時に、海水を持ち上げた際に生じた水滴に天使の力を通し、それらを操り幾重もの魔法陣を書き上げる。魔法陣から生み出された水流は垣根に襲いかかる。

十字教徒ではない人間を排除するという考えではなく、この場に現れた異物を排除すべく放たれた一撃。肩に付いたホコリを払う程度の攻撃だが、人からすればたまったものではない。数秒の過程で放たれたそれは本来ならば防ぎようのない攻撃だった。

これまでの戦闘で聖人としての力を引き出し続けてきた神裂の体は動かない。垣根と木原を助けることが出来ない。

「はっ」

垣根の背中から生える翼。その一翼を水流の軌道に合わせて振るう。水流と翼が触れ合うと水は姿を無くし、魔法陣を作った水滴の天使の力が枯れるまで続いた。

「天使つてそつちの^{魔術}世界じゃ相当な^{つわもの}強者なんだろ。それが何だ今のは?　　レベル4の^{ハイドロハンド}水流操作の方がもっと頭の良い使い方をするぜ」

「awkr a怒ksagr」

「分かる言葉で話せよっ!」

魔法陣ではなく、水で作り上げた翼を使い垣根に襲いかかる。垣根

は背中に生えた純白の翼を使い、三次元的に攻撃を避け続ける。

神裂はその光景を見て思ってしまった、翼を持つモノ同士の戦いを見て『天使同士』の戦いだと思ってしまった。それか木原が垣根を連れて来た真の目的だと知らずに。

偶像の理論というものがある。

姿や役割が似ているもの同士はお互いに影響しあい、性質・状態・能力などとしても似てくるというものであるが、それはあくまで魔術サイドにおけるこれまでの歴史積み重ねと位相の関係によつて齎されているものだ。

それを科学木原分数の子一人で行おうとしても、土台無理な話だ。ならばそのような様に場を整えてしまえばいい。

位相の揺らぎに干渉し、天使を出来るだけ不安定な形でこの位相にやってくるように調節した。身体に宿る魔力の量を減らし、今は『神の力』の位相からの魔力を横から掠め取り垣根への攻撃を抑止している。

本来ならば樹形図ツリーダイアグラムの設計者とミサカネットワークを利用して行う演算過程を、前者無しで行っている分大立ち回りが出来ないのが心残りであった。

「これで後は誰かがこの魔術を片付けてくれれば、終わりだ」

表情は変えず、しかしながらも声は吐き出すようにしか出せない木原は内心で歓喜の声をあげている。

これで現れた天使が『神の如き者』だったならば満点と評価していたところだが、その点に関しては全くの不確定事項であり、どの天使が降臨しようが関係がなかった。

むしろ『神の力』の持つ性質を受け取れるメリットがあるため甲乙付け難い。

取り敢えず木原は喉が渴いた。

閑話2—1

case. 1 過不足

「寝すぎた」

真っ白な壁に囲まれた一室の中央に置かれた酸素カプセルのような機械の中で、木原は長い眠りから目を醒ました。頭で念じると機械が脳波を読み取り、装置が開く。長期に渡る睡眠による筋肉の衰えを防ぐ振動が停止する。

装置から出る、久しぶりの床の感触だが、その間一切目覚める事も無く意識が無かった木原には数時間ぶりに立ったのと何も変わりはなかった。

「結構用件溜まってるな」

タブレットで木原宛に届いた依頼書を確認する。9割近い依頼書を削除しながら、消されずに残った1割のメールを精読していく。

削除されたものは全て木原の『オブザイバ確率観測』の前身である、『ツリーダイアグラム確率観測』の能力を目当てにしたものだ。

『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』が地上からの謎の攻撃で交信が出来なくなった現状、平凡以下の科学者たちは自らの実験の成功率を木原に求めたがる。だがそんなのは科学に対する侮辱であり、一切応える気がないのが木原のスタンスだ。

「となると……」

性急に行わなくてはならない事、時間を掛けても良いものを頭の中で振り分け各々にメールでの返信をする。殆どが定型句での返信となるためあまり時間は掛からなかった。外の廊下へとつかながる扉を開けるため、静脈認証のパネルに掌を当てる。扉は開き、一歩踏み出す。

すると木原の脳で自動的に演算が行われる。

内容は【ボンバーランス窒素爆撃の回避方向】。自らの命の危機となった場合のみに発動するように組まれた『フレイズセキュリティ確率観測』の自動執行プログラムが働いた。寝る前にこの施設の研究員に付けてもらった物のため、計画書では何度も見ても実際に体験するのは初めてだった。

周りと自分の時の流れの差異に違和感を覚えながらも演算結果を元に体を移動させる。木原の元いた場所を発射された窒素の槍が通過する。

「自動演算のタイミングが悪いな。後で改良させなきゃいけないか」

「無視すんなこの腐れ外道」

「誰が外道だ」

『窒素爆撃』を行つた黒夜海鳥が廊下の先からやって来た。着ているものは木原と同じ患者衣なのだが、黒夜のもものは腹や脇などに幾つもの小さな円形の穴が空いている。

不健康そうな隈が残る鋭い目を木原に向ける。

「もつとフランクに行こうぜ」

「人を攫つつといて数日放置する様な奴とフランクに接する事のできるアホが居るなら、是非とも会わせて欲しいね」

「残念ながら今は無理だね。時間遡行が可能なタイムマシンが開発されるとも思わないし。数週間後で良いなら鏡を見れば会えるさ」

能力を放たんとする黒夜の掌に木原も同様に掌を合せる。『窒素爆撃』の射出口である掌に触れる事は危険な行為だ、しかし彼女の演算思考を自分だけの現実を完全に理解している木原にとって痛くも痒くもない。

掌を起点とし、空気の7割を占める窒素を槍状に固定し発射する能力。その肝心要のポイントは起点が決まってる、ということだ。人間の性質上起点は2つしかなく、能力を知っているものからすればどこからやって来て軌道はどうなるかは簡単に考えられる。

普通は斜線上から外れるのが回避方法となるのだが、掌を合せるだけで窒素を固定する空間が無くなり能力が発動できなくなる。

最もそんなアホな真似をするのは木原以外にはいない。

「冗談はここまでにして。ここに居る奴らは全部俺が他の所から引っこ抜いて来た奴らだ。当然お前みたいに反抗的な奴もいたが、今はそんなのいないだろ？」

離れようとする黒夜の手を恋人繋ぎで繋ぎ直す。予想外の行動に黒夜はビクリと体を震わせ、生まれて初めて感じる手の暖かさに心が

揺らされる。

「なにすんだ」

「黒夜が会いたいって言うから会いに行こうかなって。食堂なら誰かいるだろ」

ほれ行くぞ、と言われて連れて行かれる黒夜は愚痴を言いながらも頬を染めながらついて行った。

case. 2 出合い

「どうして私なんだ？」

「はあ？」

先程見ていたメールの中から今日訪問する先を決めて、何となく隣をついてくる黒夜と一緒にそこへ向かっていった。

多分この質問はこの時のことを言ってるのではなく、どうして黒夜のみを研究室から連れ去らったかという意味であるのは分かる。

「木原の研究所に乗り込むなんて頭イカれてる」

「あんなのを木原って呼んでいいのか俺は疑問に思うけどな。発想が陳腐で面白みがない」

「ふうん」

敵地に攻め込む事に対して何一つも思う所がないような口ぶりだ。実際、木原にとって相手が格下だったことは事実だった。たかが無意識で科学を悪用出来る位で、木原を名乗ろうなんて凶々しい。

「一番の理由は『暗闇の五月計画』の被害者だから。数少ない被験者を手元に欲しいなと思って」

「へエ」

「こわいな。欲しいと思ったのは他者の『自分だけの現実』を埋め込まれた場合の変化だけだよ。それが偶々『暗闇の五月計画』だっただけさ」

「それくらいならオマエでも出来るだろ。なんなら能力を使えば一発だ」

空になったペットボトルで黒夜の頭を叩く。ポンと軽い音がする。

「科学者が自分の実験の結果だけを先読みするなんてナンセンスだろ。それに被験者を増やすっていうのも俺のやり方に合わない」

通りかかった公園に設置されている自販機のゴミ箱にペットボトルを投げ捨てる。その公園にいる人はいないのでその行為に不感を持つものはいなかった。

「それに俺はお前を必要だと思った。俺は必要な駒を誰かに盗られるのは嫌だし、手元に置いて置きたいんだよ」

「嘘だな。私の承認欲求を埋め手籠めにしようとしてるのが丸わかりだ」

「一生勘違いしてろバカ」

優しさには触れず、人の醜いところのみに触れ合ってきた。そんな黒夜には木原の優しさが裏のある汚い物にしか見えなかった。ある側面ではそれは事実であり、その点には木原も仕方ないと諦めるしかなかった。

だからこそ、自分ではなく他者にその役割を任せることにした。

「あれ？　ぶそくだ！」

「本当だ木原せんぱーい」

学園都市では珍しい白色修道服の少女と掃除ロボットに乗ったメイド服の少女。木原には出来ないことが出来る二人だ。

「ぶそくもとうまみたいに色んな女の子連れてる!?!　どうして!?!」

「人をそんな節操がないみたいに言わないでよ」

「たしかに上条みたいに木原先輩もいろんな女性と一緒に居ることが多いなー」

「舞夏もそんな事言わないでよ」

「だって事実だろ?」

言われて考えてみるとたしかに色んな女性をとつかえひつかえしていた。風紀委員の後輩やアイテムの面々、それと最近良く絡んでくる木原円周。

「たしかに」

「言ったとおりなんだよ!」

「まあそんな話はもう良くて、そのパンクな服装の子は誰だー?」

アイコンタクトで舞夏に上手く話を逸らすように頼むと、自然な流れで話題が黑夜へと移る。あとで何か奢つてと伝えてくるマツチポンプなメイドに感謝しなくてはならない。

そして話題の矛先になった黑夜はあたふたしている。研究所での生活が長く、人とのコミュニケーションというものが無かったが故に急に話題を振られると慌てる。

木原との会話は被害者加害者という関係によって、研究室で数多く触れた恨み辛みの感情で会話が成り立っていた。しかし、二人から向けられた純粋な興味。それは初めて味わうもので、上手く思考が纏まらない。

「こいつずっと研究所に閉じ籠つてたから話すのが苦手なんだ。あんまりグイグイ行くと、コミュ障出るから優しくな」

「コミュ障じゃねエー！」

「ほれ、その調子で自己紹介」

背中を軽く押して二人の方へ行かせる。

「私はインデックスって言うんだよ！　あなたの名前を教えてくださいな」

「黑夜海鳥」

「よろしくね！　うみどり！」

純真無垢なインデックスの笑顔を真正面で受け止めてしまった黑夜は更に顔を赤くして俯く。

「よ、よろしく」

「よろしくなー！　私は土御門舞夏だぞー！」

うんうん、と黑夜が年相応の反応を示したことに木原は内心ほつとする。二人でいる時は一方通行の攻撃性を前面に出していたため、インデックスと舞夏にも出さないか一応心配していた。

それに、これで駄目だったらこれから行く所ではもつと大変なことになっていただろう。

「二人ともこの後暇か？」

「うん！　とうまが学校行ってるから、まいかとお散歩してただけだから」

「私もシスターの面倒を見るだけだから何もないぞー」

「なら、これから俺たちが行くところに付いてくるか？」

インデツ

クスと同じ位の年齢の子も居るから楽しいと思うが」

「行くー！」

「おいっ」

黒夜が首根っこを掴んで少し後ろの方へと引つ張っていく。木原は特に抵抗することなく、なすがままにされる。

「なに？」

「アイツらと一緒に行くつもりか？」

「そうだけど。嫌？」

「私たちみたいな暗部の人間とは出来るだけ居ないほうがいいだろ」

人付き合いが得意じゃない割には、周りの事をちゃんと見てるし考えていた。

「それに関しては大丈夫だ。あの二人には凄く後ろ盾があるから、俺たちといっしょって事は瑣末な問題でしかないさ」

「はあ？」

「つまりは、お前は同年代の子と仲良くするって事だけを頑張れば良いってこと」

閑話2―2

case. 3 奪い合い (A・B・)

「とか言つてたくせに、着いてすぐに居なくなるとか頭可笑しいだろ」
やつて来た施設のソファァーに座りながら悪態をつく。インデックスと舞夏は大広間で交流を取っているが、黒夜は流石にそこまでは出来なかった。こんな汚れた手で、無垢な子供たちと触れ合うことが出来なかった。

応接室からその様子を見るだけ。あちらの光景は彼女には眩し過ぎた。

「コーヒーはいかがかね」

ここの施設の管理人として木原に紹介された女性、木山春生が氷が浮かんでいるアイスコーヒーのグラスを差し出して、声を掛けてきた。

首肯で済まし、グラスを受け取った。

その様子を見て木山は微かに笑みを浮かべる。

「彼は面白いな。私の次は君のような少女か、節操がないと言えばそうだが意外と筋は通っているのか」

見た感じと雰囲気は美しいと思えるのだが、目の下に薄っすらとある隈とレディーススーツに白衣のファッションが残念感を出していた。

黒夜は木山の発言に興味を持った。

「おや、何も聞かされずにここに連れて来られたのかい？」

「まあ」

「ふむ。そこあたりはまだ人との付き合いが慣れてないと取るべきか、私が説明する事を見越して伝えなかったのか。まあいい、君がこうして暇ならそれ相応の役にはなれるさ」

夏だというのにホットコーヒーを一口のみ、喉を潤す。

「君は『木原分數』という人間をどう見る？」

「自分勝手にこっちの都合なんか気にしない糞野郎」

「随分な言われようだな」

所感はそんな所だ。本人にも言ったことだが、いきなり現れて連れ去って放置する、なんてことをされたら当然良い印象は抱かない。それに今日も何だかんだ言ってイニシアチブを取られっぱなしだし、イライラしている。

「と言うことは彼の思惑通り、君に悪感情を抱かせる事に成功していると言うわけだ」

「アレはあいつの素だろ。何言ってるんだ？」

「ではそれでいい。自分の意見を持つということとはとても大切だからな」

心の掌握についてのプロフェッショナル二人から、手解きを受けた木原の心理操作はそう簡単に解けるものではなかった。木山も研究者や教職者として少しは知識があるものの、それでは敵わない。

むしろその程度では解けないほど強く掛ける理由が存在していると考察した。

「彼はある目的を達成する為に行動している。そのためなら過程はどんな手段をとってもいいと考えている」

「あいつらしい」

「けど、彼と行動するにつれて歪みが存在する事に気付けた。歪み、というよりも目的と過程のすり替えだな」

机に設置されているメモ帳とボールペンを使って説明を始める。

「普通は『目的』があるから【行動】が存在するだろう。しかし彼の場合は、【行動】したいから『目的』を設けている」

例えば『肉を食べる』という目的の為に【肉を調理する】という行動が生じたとする。

実はそれは【肉を調理】したいから『肉を食べたい』という目的を設けているということ。

「目的よりも行動の方が大事。だが、それを認識しないようにしているのか？」

「おそろくそうだろうな」

となると彼が言った『他者の自分だけの現実を埋め込められた能力

者が欲しい』という目的は本心ではなく、【黑夜海鳥を手に入れる】方が狙いだっただという事になる。

「意味がわからない」

「そうだろうな。私もどうして彼がこんな思考回路を持っているか分からない」

また一つ木原に聞かなければいけない事が生まれた。しかし、まず帰ってきたら窒素爆撃を御見舞しないと、このモヤモヤはきつと解消されないだろう。

case. 3 奪い愛 (A・B・)

「ねえねえ、分数お兄ちゃん！ 分数お兄ちゃん？ 無視しないでよ」

「何でこんな所にいるんだよ」

黑夜達を木山に預け次の目的地に向かう途中で、ここ最近で一番会いたくない人物と会ってしまった。ただでさえ、木山からあの事件以降の経過を聞き、分数が手配した施設の使い心地を確認し改善点を探すという工程が出来なくなったことにイライラしていたところだった。

「返事しないとヤツちやうよ？」

「それはどの『木原』のやり方だ？」

「分数お兄ちゃん！」

「そんなやり方はしない」

「そうだったね、やるのは不足お兄ちゃんだもんね」

鈴のような声を聞いて分数は足を止める。先程まで後ろを付いて歩いてきていた少女は、分数の前に立つ。夏の太陽を遮る為の麦わら帽子、その下辺りから生える二本の髪の毛の尻尾。ピンクのTシャツとホットパンツはまるで店員のおすすめのような組み合わせ。異彩を放つのは首から下げられたいくつかの電子機器。

木原円周は純粹な笑みを浮かべて、俯く分数の顔を下から覗く。

「ねえ、分数お兄ちゃんは本当に木原を辞められると思っちゃってるの？ ふふふ、おかしい」

「コンタクトでグラフを見てるのか。この気味の悪い感じ、病理の手を使って諦めさせようとしてるのか」

「ありや、バレちゃった」

「覗き見に来てるんだからわざとだろ」

嫌いなもの木原の一端に触れて冷静さを取り戻す。止めた脚を再び前へ進める。

「んで、なんでいるんだ？」

「お兄ちゃんが面白そうなごときそうだなって思ったから。当たって良かった」

「俺のデータを取りに来たのか」

「えへへ、どうでしょう？」

この手合いの、あしらい方は知っている。無視だ無視。あざとく裾を引つ張る円周を無視して、先程通った道を逆へ進む。

途中、工事中を知らせる立て札があったが視界に収めながらも中へ進んでいく。

「ねえねえ、今日の敵は誰なの？ あつ、待つて。今考えるから」

円周はこの現状を楽しんでいた。分数と出会うまでの日々の全ては、この世界の規則や法則を学習する為の時間でしかなかった。物を見てそこから円周にとって未知の既存の知識を学習し、人と触れ合いその共通点から規則を見出す。

それが当たり前であって、日常だった。木原不足と出会うまでは。

「いたっ！」

「前見て歩けよ」

昔を思い出しながら歩いていたせいで、前方が不注意となっていた。立ち止まった分数に気づけずそのまま背中に顔をぶつけた。少し苛立って円周の方を振り向く分数の先に、三人の人影が見える。

全員が顔を隠す覆面を付けており、着ているものは上下が一緒になっっているつなぎ。明らかに昼間の公園に相応しくない三人を更に怪しくするのは、背中に背負われたリュックサック程の大きさの金属の箱。そしてそこから伸び手に持っているホースだった。

木原達の声に気づき、三者全員が声の方を向き臨戦態勢を整えてい

る。

「気づかれたんだが」

「うん、うん。分かってるよ、分数お兄ちゃん。こういうとき『木原』ならこうするんだよね」

何度も何度も見返し、理解した分数のグラフとデータは頭に刷り込まれている。外部からの入力が無くて、完璧に引き出す事が可能だ。その事を理解していた分数は服の襟の部分を後ろから掴んで、突っ込もうとする円周を止める。

「分数お兄ちゃんともっとお話したいのに、あいつら邪魔なんだよ？」

「なら潰さなくっちゃ」

「見事な『模倣』ありがとうございます。でも、あいつらは俺の敵だ。それを部外者に横取りされるのは気に食わない。なんなら、お前をぶっ潰すのを先にしてもいいんだぜ？」

「強がりばっか。でもまあ、お兄ちゃんのデータがもっと採れるならいいかな」

おとなしく引き下がる。首から下げている端末を起動して、録画を起動して撮影に移る。ちなみに、ここまでの音声は別の機器で撮っていたりする。

「さて、黑夜海鳥の情報を入手してくる無理難題を木原典型から依頼された、暗部の下部組織『アルファ』の方々。そのホースで吸い込んでみたいけど、何か良いものは取れたかな？」

質問の返事は炎だった。

ホースの先を向けると、手元のスイッチを押す。そして勢い良く吐き出された炎は分数と円周を包む。

「対象及び部外者の排除成功」

「しかし、随分と威力が高かったな。これじゃ骨しか残らないんじゃないか？」

「そこまですろってのがクライアントの命令だ」

火炎放射器の形式は多岐にわたる。今回支給されたのは、3つで1つの火炎放射器。ホースの先から射出されるレーザーで対象を位置を補足し、脇二人が炎上しやすい薬品を対象を囲むように配置する。

そして真ん中の一人が炎を放つことで着火させる。

その後は計算された式に従い、風が送られ炎のドームが完成する。中は蒸し焼き状態を通り超え、アスファルトすら溶かす高温に水は失われ人の形を保っていられなくなる。

パキンと何かが割れる音がした。

「おいおい、この程度で俺様をぶち殺せると思っているのか？　そんなわけ無いよなあ？　だとしたらとんだ笑いもんだな、オイ」

炎の壁から声がする。そう、聞こえてくるのは壁の向こう側からなのだ。本来は半球形になっている筈の炎が、地面に対して直角に立っている。

「回収用のホースとバックパックに火炎放射器の機能をぶっ込むのは効率的だ。そして三人がそれぞれの役割を持つってのは考えてなかったが、それでも対処出来る域を出ない」

炎の壁はどんどん高くなっていき、制御が効かなくなっていく。自らに被害が及ぶことを恐れて、火炎放射器を停止させる。

炎のカーテンは消え、二人が姿を現す。

先程まで浮かべていた嘲笑は消え。顔には無が存在している。

「エアカーテンを使った対炎装置。瞬時展開とか、二層構造にしたりとか結構な量の技術を合わせた『分数』の最高傑作の内の一つだから解説してやるところなんだろうが、生憎と今の俺様はそんな気分じゃなくてな」

後ろでニコニコ笑っている円周の首元を掴む。

「何しやがった？」

「うん、うん。分かってるよ、病理おばさん。こういうとき『木原』ならこうするんだよね。私は分数お兄ちゃんも好きだけど、一番好きなのは不足お兄ちゃんなんだ。だからね」

徐々に呼吸が苦しくなるにも関わらず、にこにここと笑みを浮かべて言葉を紡ぐ。

「分数お兄ちゃんには諦めて貰わなきゃ。私がどうやって他者の思考をインプットしてると思ってるの？　それをお兄ちゃんにしてあ

げる事なんて、『木原』のやり方を使うと簡単なんだよ?」

「ちっ」

舌打ちを残して、円周を後方へ投げる。円周はうまく受け身を取り、これから始まる戦闘へのワクワクを積もらせていく。

「撃てー!」

リーダーと思われる男の声で、武器を火炎放射器から鉄砲に変え射撃が行われる。鳴り響くのは合わせて3つの銃声。

「はあ。そんなんじや駄目だ駄目。練度も数も何もかも全然足りない」

3つの銃声と共に壊れた3丁の鉄砲。

「三位一体の理論骨子自体は面白みがある。だがそこから先は凡人だな。脳波リンクや一つに同期しての発射、考え無くてもこれ位は出るさ」

銃を構えて冷淡に言葉を並べる。

三回の発射で的確に、寸分の狂いもなく銃口に弾は入っていった。既に三人の銃は破壊され、使い物にならない。

「驚く顔すんなよ。こんなの一度成功したら、その成功と同じ感覚で行うだけさ。こんな風にな」

同じ様に三連射。

全て頸動脈を傷つける軌道を辿り、首からは大量の血がドクドクと止めどなく流れ続ける。

「ちっ。情報を引き出すのを忘れた」

後ろを見ると円周は姿を既に消していた。消える前にこの状態を解いてからにしろよ、死体を蹴り八つ当たりしながら食蜂に連絡を取る。

また借りを作ることになるが、この状態木原不足で生活をする時間を早く終わらせたかった。

「待っててね、不足お兄ちゃん」

「これで開会式は何とかなりそうだ」

先程の電話で開会式への参加を承諾したレベル5がいるとの連絡によつて、運営委員はまた一つの大きな仕事をやり終えた。

今年は前年までの前優勝校の選手宣誓ではなく、レベル5にやらせろという指示が上層部から伝えられた。その場で大いに反対意見が挙がったが、上層部の意見には断れない。

しかし実行可能かと言われたらそれも怪しい。何故ならあのレベル5だ、そう簡単に承諾してくれるとは考えられない。それに、そもそもコンタクトを取れるのかという問題がある。

そんな時だった、運営委員会と風紀委員の合同会議で愚痴をこぼしていると、鶴の声があつた。「全員に連絡取れるから聞いとく」そんな軽いノリで風紀委員本部所属の木原分数が手伝うと言つたのだつた。

Case #1

交渉役を引き受けた木原はせっかく全員に会うんだから順位を上から制覇しようと、まずはカエル顔の医者のある病院へやって来た。

「一方通行ってどこ？」

「その突き当りを左に曲がつて3つ目の病室です。とミカサは丁寧に教えます」

「ありがと。これは皆で食べて」

「なっ！ 予約で一杯の数年は食べられないと噂のシユークリーム！ とミサカは顔には出ませんがとても驚いています」

それじゃーね、と別れを告げて教えてもらった部屋へ向かう。しかし随分と感情が表に出るようになったなあと、御坂妹の成長に少し驚いた。

コンコンコン、ノックを3回したが返事はなかった。だが部屋の中に人が居るのは気配でわかり、木原の目には熱源が一つ映っている。「邪魔するぜ」

横引きの扉を開けると真っ白い男がいる。独特のセンスの服を身

につけ、白髪はしばらく切られて無いであろうと予想できる。来訪した木原に目を向けることなく、男——一方通行は手元の本を読んでいる。

そんな態度を取られることは分かっていた為、木原は手に持っている先程自販機で買ったばかりの飲料水の入ったペットボトルを一口飲んでから、一方通行へ投げつける。

投げられたペットボトルは一方通行に当たる、というギリギリのところまで軌道を変える。まるで巻き戻しの様に木原の元へ戻る。

「いきなり何しやがんだ」

「術後経過観察」

一方通行は悪態をつき、面倒くさそうに顔を歪めて首元の^{電極}「チョコカー」を弄る。また面倒くさいやつが来たなとため息を吐き、缶コーヒーを呷る。

木原は戻ってきたペットボトルを観察し、また一方通行の周りの様子も観察している。

「術後の様子を見るのに、頭目掛けて投げる奴がいるか」

「俺だけど？」

「うぜエ」

「わざと当たりどころが悪くなるように回転を掛けて投げてやったんだ、感謝しろよ」

「さらにうぜエ」

「お前もこっちの脳天目掛けたろ？　それで相子だ」

一方通行のまわりに水滴がこぼれていない。結露でペットボトルに付着していた水滴は全てペットボトル共に木原の方へとベクトル操作されていた。それにわざと面倒くさい回転を掛けたペットボトルも寸分の狂い無く頭にやって来たので、能力に関してはもう心配ないのかもしれない。

「それで、なんの用だ？」

「ほれ、これを見て」

「ンだア？　大覇星祭へのお誘いだア？」

「そ、上層部がせっかくだからレベル5を選手宣誓に呼んで全世界に

アピールしようぜ、って企画らしい。参加する？」

「ふざけてンのかア？　俺の今の状況でそんなところ出られるわけねエだろ」

「だから確認取りに来たわけ。おけおけ、第一位には断られたってことで次行くわじゃ。打ち止めよろしく言つといて」

Case #2

「どうして俺が、未来が輝かしいものだとか考えられない夢とか希望とかを信じてる青二才達の為に、こんな事をやらなきゃいけないだ」

「いいじゃん別に」

「良くねえよ」

大霸王祭へのお誘いの紙を見せたものの、やはり反応が悪い。確かに暗部所属、もしくはそれに近い場所の者は難色を示すことは想像できている。

しかしだ、ここまで強く拒否するのは第四位、麦野沈利くらいなものだと思っていた。

「なあ心理定規ちゃん、なんでこいつこんなに機嫌悪いわけ？」

ソフアーに背中を預け、隣の心理定規に尋ねる。

「私にだって分からないわよ。ここ最近ずっとこんな調子だし、私達まで能力に潰されるんじゃないかって気が気じゃないわ」

「えーこわ、自分の気持ちを制御出来ないガキじゃん。えーこわ」

垣根の目を読み解くと、明らかに自分に悪感情を持っていることがわかる。はて自分は垣根に何かしただろうか。

あの御天墮しの事件から垣根とは会っていない。なのでもし何かあったらその時なのだが、いくら考えても答えは出ない。

天使との戦闘の後に正体を尋ねられた際、「天使だけど、お前も同じ感じに羽生えてるから天使じゃん、ガハハ」と返答したのが悪かったのだろうか。

それはその場で頭を叩かれて終わりになった筈。事件は解決したので次の日は海に入ったり、砂浜で遊んだり童心に帰って遊んだ。

「あつ！　なるほどなー」

「凄いニヤニヤしてるけど、何があつたか分かつたのね」

「垣根くんはあれだ、夏休み一緒に遊んだ友達からその後の連絡が無くていじけてるのかなあ？　だってあんな風に遊んだのって久々、いや初めてだろ」

「なにそれ、可愛いところあるじゃない」

垣根からの返答はない。凶星だろう。

「ごめんな、うちの研究室に新しい被験者入れたから余裕なくてさ。あと木原のあのストーカーにちよつかい出されたせいでイライラしてて忘れてた。寂しかったよな、すまん。なんならこれから遊びに行く？」

「さつきから黙って聞いてれば、勝手にあること無いこと言いやがってふざけんな！」

顔だけで人を殺せそうである。

背中には三対六翼が生えている。

「そんなに怒ることないって」

「あなた、その煽りは無意識でやってるの？　だとしたら才能よ」

「垣根にだったらここまでやっていいのかなって、意識的にやってるが」

「そう。あなたのせいで私も被害受けそうなんだけど」

「まあまあ」

目の前の脅威垣根も何のその、無視をし続ける二人にその羽根を振るう。未元物質でできたその翼は、ただの人であれば一撃の内に葬る程の力を宿している。

だからこそ、今こうして木原分数なんかの目の前で停止させられるはずはありえない事である。

「そうやって照れ隠しに能力を使うのは駄目だろ？

俺じゃなきや

二人とも死んでたよ」

「確率操作をしたわけじゃなきさそうだな。アレにこんな事が出来るはずがねえ。もつとちやちなもんだろ」

「たしかに確率操作はしてない、だけど能力は使った。この違いは分

かるよな？」

残りの五枚の翼で追撃を仕掛けようとして気づく、自ら生えているこの翼がもう自分の意志では動かせない事を。

「確率操作は副産物。正体はこれって訳か」

「正解。では更に問題だ。その正体とは何でしょうか」

木原が麦野との戦闘を避けているのは知らされている。それを昔ながらの仲だから、と片付けるのは簡単だ。

しかし、仮に他の理由があるとしたら。

垣根帝督の能力には干渉できて、麦野沈利の能力には干渉できない理由が。それ故に戦闘を避けているという事実が存在するならば。

「そのイタズラに成功したような顔はやめろ。性格の悪さが出てるぞ」

「それはマズイ。こういうのは過去に捨ててきたんだった。どうだ、答えは出た？」

「これから見つけてやるよ！」